

漆の未来 協同で作る

大城さゆり



「玉座—前田貝揃案 創設展—」で展示された前田比呂世氏の作品（右から1、3、4番目）と前田彬氏の作品（同2、3番目）
|| 那覇市のギャラリー・アトス

3月26日から4月3日まで、那覇市のギャラリー・アトスで、前田比呂世氏と前田彬氏の親子による展覧会「玉座—前田貝揃案 創設展—」が開催された。本展は「漆工房 前田貝揃案」の旗揚げ展であり、彬氏の妹である佳那氏の発案で設立に至った。

彬氏によると「貝」は貝摺（漆）を意味し、「揃」は顔を揃えて協同すること、「案」は未来へのプランを生み出すという意志が込められる。漆作品の制作および研究の場として、また国際的な交流のプラットフォームとして、工房と称しながらプロジェクトに近い活動を目指す。

タイトル「玉座」は、2019年に首里城とともに焼失した琉球国王の玉座を示唆する。制作者は彼らの父である比呂世氏である。前田孝允氏、復元に携わった首里城をわが子のように大事に思っていたこと

寄稿 「玉座—前田貝揃案創設展」

知られる。比呂世氏は幼い頃に手伝いで孝允氏から漆を習い、彬氏は比呂世氏から習った。首里城は、彼らにとって漆を通じたファミリーヒストリーにつながる。

2人は、制作活動を漆器からスタートさせた。本展には、制作の原点を偲ばせる比呂世氏の《朱微塵黒漆螺鈿鉢》（1984年）と彬氏の《黒漆八角螺鈿盆「混」》（2006年）も展示された。彬氏は前述の作品による沖展入選の際、審査員であった孝允氏から「創作的な柄であるから伝統的な八角盆という形である必要はない」と評があり、もっと自由な創作を志向するようになったという。その後はストリートカルチャーの影響を受け、グラフィックデザインの中心に活動してきた。琉球王国文化の粋である漆器と、現代のストリートカルチャー。対極的で異質な組み合わせだ。

出品されたグラフィック作品では、インターネットでアクセスされたサイトが存在しない場合に表示される「404 not found」を用いて玉座の喪失を表し、代わってたれでも座ることができると公認のベンチが登場する。彬氏は東日本大

震災の後、岩手県陸前高田市で「1日も早い復興」の掛け声のもと、戸惑うほどの速さで町が作り替えられていく風景を見た。「復興」の当事者は誰か、という疑問は、首里城の「復元」にもつながる。

一方で比呂世氏は、これまでは油絵の具のほうがより自由な表現が可能だったとして、人体や骨、あるいは皮膚といったモチーフを描いた油画を制作してきた。しかし近年は「漆の作品はこうあるべきだ」と捉われていた観念の枠を広げて、これまで油画で追及してきたテーマの延長となる、サンゴの上にストッキングを貼り、漆を塗り重ねた《酸化被膜》シリーズを制作している。

貝揃案は、展示や研究などによる交流を通して「漆を素材とした表現を描き出しうる新たなフレームの構築」を目指しているという。比呂世氏と彬氏、それぞれが考える伝統、あるいは漆に対するフレームの形は決して同じではない。その違いを振り返り確かめつつ、今後企画している展示や交流を経て、フレームがどのような広がりを見せるかは未知数である。